

## 多義語の日西対照研究

— 聴覚器官の場合 —

三好 準之助

Carlos Vicente FERNÁNDEZ COBO

三好はこれまでに、多義語の代表的存在である身体部位名詞のいくつかについて、日本語とスペイン語におけるその多義の構造を比較対照して検討した結果を発表してきた。今回はスペイン語のネイティブであるフェルナンデスの協力を得て、日西両語の人間の聴覚器官に対応する語についてその多義の構造を組み立て、比較対照してその相違・相似の様子を報告することにする。

### 1. 分析モデル

多義構造の分析モデルは三好 (2009a) で紹介されたものである。後述の図1、図2のように「定義」－「対応語」－「基本義」－「拡張義」という組み合わせで分析する。

### 2. 日本語の対応語「耳」の多義構造

日本語で聴覚器官に対応する語は「耳」であるが、この対応語について、本稿で分析の対象となる語義を限定して分析し、多義構造を明らかにしよう。

#### 2.1. 分析対象の語義

これまでと同様、5種類の現代国語辞典（「広辞苑」「大辞林」「明鏡」「岩波」「新明解」。参考文献のなかの「語義設定のために参照した辞典」を参照のこと）の3種類以上に共通の語義を選んだら、以下ようになった。語義の記述には「広辞苑」を参照した。語義の番号は本稿のものである。

- 1) 聴覚器官。
- 2) 耳殻。耳介。
- 3) 聞くこと、聞こえること。聴覚。また音に対する感受性。
- 4) 耳殻のような形をした取っ手。
- 5) 織物・紙類またはパンなどの縁 (7才)。
- 6) 大判・小判のへり。転じてその枚数。

の6種類である。

つぎに、これらの語義を検討してみよう<sup>1</sup>。

## 2.2. 語義の検討

まず、語義1)は「定義」である。本稿の分析モデルにある「定義」も〈聴覚器官〉とすればいいであろう。その内容は百科事典的な情報であり、おおむね「聞く能力をもつ器官で、頭の両側にあつて内耳・中耳・外耳に分けられる。外耳には小さな穴状の外耳道が開いていて、その外部は耳輪で囲まれた貝殻状の耳殻になっている」のようになる。

語義2)の「耳殻、耳介」は、「耳」の基本義の中の意義特徴VI「包括部位」に含められよう。「耳殻」という概念は基本義のなかに含まれていることになるが、独立した語義として認定されてもいる。本稿では、そのように認定されているときには意義特徴VIから換喩で拡張した語義として扱う(独立した語義として認定されていない場合には焦点化語義(多面的多義)となり、拡張義としては扱わない)<sup>2</sup>。

語義3)「聞くこと。聞こえること」は「耳」の基本義のなかの意義特徴III「機能」に含められる。しかし「聴覚」という語義の扱いには意見が分かれることになる。感覚器官の身体部位名詞で起こることであるが、言語によっては、日本語の「耳」の場合のように、独立した語義として認定されている場合と、そうでない場合がある。上記の語義2)で断っているように、独立した語義として認定されているので、意義特徴IIIから換喩による拡張義として扱う。またこの語義には「音感」と呼べる内容も含まれている。しかし「音感」は別の語義としては提示されていないものの、それは「聴覚」の下位に位置するべき概念であろう。「聴覚」から提喩によって拡張した語義として扱うことにする。

語義4)「耳殻の形に似たもの」は基本義の中の意義特徴I「形状」に含められる。しかし同時に、意義特徴VI「包括部位」のなかの耳殻に直結している。しかも鍋などの「取っ手」は熱伝導を低くするために中空であるが、そうなると、耳殻の一部である「耳輪」(ジリ)が意識されていることになる。さらに、「取っ手」の場合には容器の両側についていることが多いが、そのときの意味の拡張のための認知には「耳」の位置の意義特徴(II)のなかの〈頭部の両側〉という概念との類似関係も関連しているであろう。

では、語義5)はどうであろうか。「織物・紙類またはパンなどの縁」である。この「縁」という概念は、「耳」の意義特徴のV「包括部位」の中の「頭部」の縁になるのであろうか。耳殻は頭部の両側の位置を占めているが、縁と言えそうなまでには、その周辺部を占めてはいない。であれば、耳殻の中の耳輪になるのであろう。耳輪は耳殻の周辺部を占めているからである。この語義は「新明解」では「平たいもののふち」となっている。耳殻と耳輪との関係であろう。

語義6)「大判・小判のへり。転じてその枚数」は「広辞苑」「大辞林」「岩波」に記載されていた。この語義も小判などの「へり」ということであるから、まず小判の形と類似しているとすると、それが耳殻に相当し、その周辺部に注目されているのであるから、耳輪との類似性が認知されているのであろう。語義5)に似たようなプロセスで拡張した語義である。しかしこの形状からそれを備えたもの(大判・小判)の枚数に意味拡張するプロ

セスを説明するのは難しい。慣用句からの意味拡張であろう。基本的な慣用句である「耳を揃える」を考えてみよう。大判・小判の1枚には「へり」(耳-単数)があるが、求められている枚数のものを重ねてそれらの「へり」を揃え、その数を確認するとき、重ねられた数だけの「耳-複数」が存在することになる。求められている数に相当する「複数の耳」は、その数という特性だけに注目されれば「枚数」という意味を示すことになる。本稿では、「転じてその枚数」とされる意味拡張は特性に注目した換喩によるものと解釈したい。なお「耳を揃える」という現代語の慣用句では、大判・子判の話ではなくて、金額の全量を用意する意味で使われている<sup>3</sup>。

なお、注1で紹介されているように、「耳」には「針のめど」という伝統的に使用されてきた拡張義がある。現代日本語では、参照した5種類の辞書の中の2種類にしか採用されていない<sup>4</sup>。

結局、語義1)以外の分析対象の語義は5種類になるが、語義2)「耳殻」が基本義の意義特徴のVI「包括部位」から換喩によって拡張し、語義3)の「聴覚」が意義特徴III「機能」から隠喩で拡張しているものの、語義の4)「取っ手」、5)「パンなどの縁」、6)「小判などの枚数」は「耳殻」(とくにその耳輪)との類似関係から隠喩で拡張していることがわかった<sup>5</sup>。

### 2.3. 「耳」の多義構造

上記の分析対象の6種類の拡張義を本稿の多義構造の分析モデルに従って分析すると、以下ようになる。今回は語義の数も限られているので、注1で紹介した4種類の語義も加えて構造図を組み立ててみよう。以下の図1である。分析の結果、意義特徴としてはI, II, III, VIのみで間に合うようである。

なお、スロットI「形状」の内容は「耳殻は貝殻状で、その周りは耳輪。外耳道は小さな穴」あたりになるだろうが、形状との類似が認められて拡張する語義は、包括部位のそれぞれから拡張するものとする。

### 3. スペイン語の対応語について

スペイン語で聴覚器官に対応する語には、2種類ある。'oído' と 'oreja' という2語である。それゆえ、副対応語の処理をしなければならない。これについて三好(2009a: 225)では次のような断りがなされている。

定義の内容によれば、一方の言語では対応語が1語であっても別の言語では複数の対応語になる可能性もあろう。別の言語の複数の対応語のあいだに見られる意味的な関係はいくつかあるだろうが、その関係のひとつに、基本語が1語で、その語の指示する身体部位がいくつかの下位区分された部位を含んでいて、その部位の名詞が残りの対応語になっている場合がある。[...] 副対応語は基本的な対応語の下位に置き、スキーマの中では破線で囲み、おなじく破線でスキーマの外に

「耳」の多義構造

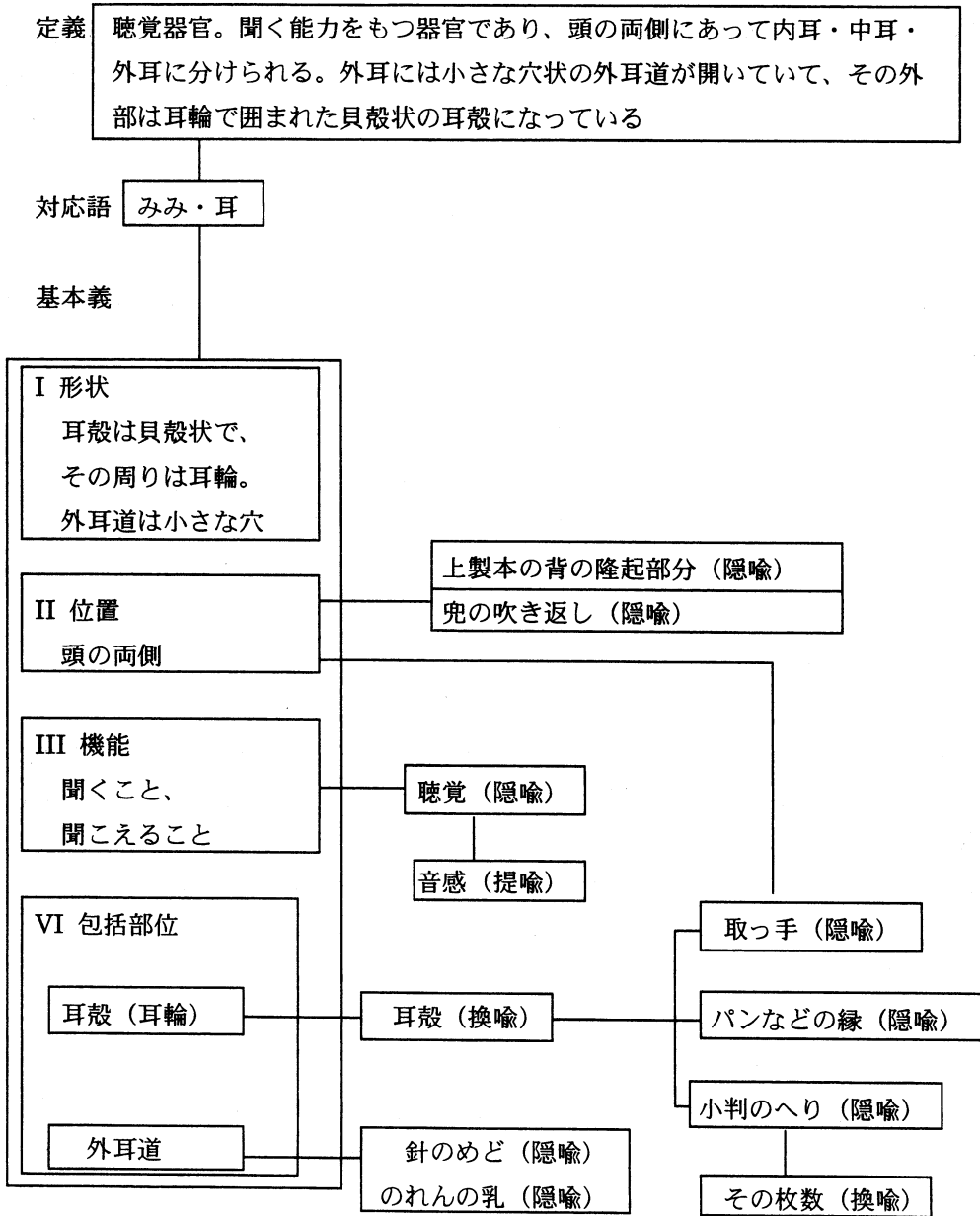


図 1

出して別種のスキーマを設定する。それを副スキーマとする。そして必要があれば副スキーマから拡張義の存在を指摘する。しかし本稿の目的はあくまで基本的な対応語の多義構造を日西両言語で比較対照することであるから、副対応語については、この比較対照を理解するうえで参考になる二次的な情報として扱い、そ

の語義も拡張義も簡略化して提示することにする。

しかしながらスペイン語における聴覚器官の対応語である *oído* と *oreja* の場合、以下で確認するように、後者は前者の部分の指していることから、前者を主たる対応語に、後者を二次的な対応語として扱うことにする。しかし両者の多義性はほぼ対等なので、*oreja* の語義や拡張義は簡略化しないで提示することにする。

### 3.1. 分析対象の語義

参考文献の末部に挙げた6種類の現代スペイン語辞典を参照し、そのうちの4種類以上に記載されている語義を分析することにする。語義などの内容は DRAE のものを参考にする。2種類に分けて紹介しよう。

#### 3.1.1. *oído*

- 1) 聴覚<sup>6</sup>。
- 2) 音感<sup>7</sup>。
- 3) 火門 (炮) <sup>8</sup>。
- 4) (二つあるそれぞれの) 聴覚器官<sup>9</sup>。

以上の4種類の語義が分析対象となる。

#### 3.1.2. *oreja*

- 1) 聴覚器官 (外耳) <sup>10</sup>。
- 2) 聴覚 <sup>11</sup>。
- 3) (軟骨組織の) 耳殻 <sup>12</sup>。
- 4) 靴の、紐などで甲に固定する両側面 <sup>13</sup>。
- 5) 道具などの先端部にある二股に分かれた部分 <sup>14</sup>。
- 6) 取っ手 <sup>15</sup>。
- 7) 袖付き安楽椅子 (ウインギチェア) の背の先端に付いている頭もたれ <sup>16</sup>。

参照したスペイン語辞典の4種類以上に記載されていた語義は以上の7種類であった。

### 3.2. 語義の検討

語義の検討も2種類に分けて行うことにする。

#### 3.2.1. *oído*

1) 「聴覚」は感覚器官として基本的な抽象的語義で、スロット I 「定義」にも含まれる意義特性のひとつである。スロット IV 「機能」には〈聞くこと、聞こえること〉という意味が入っている。この機能との類似関係から隠喩で拡張した語義として扱う。2) の「音感」は日本語の「耳」の場合と同じように、意義特徴のスロット IV 「機能」から機能の類似によって拡張した「聴覚」という語義から、さらにその下位の概念として提喩で拡張した語義であろう。3) 「火門」は古い鉄砲の、火気を筒に通す小穴のことである。外耳道との形状の類似に注目した隠喩によって拡張した語義であろう。意義特徴の VI である「包括部位」のなかの、外耳道から拡張したものとして扱う。4) 「聴覚器官」は基本義に相当す

る。

### 3.2.2. oreja

1) 「聴覚器官 (外耳)」は基本義に対応しよう。ただし、その外部しか指さない。「ラールス」などでは *Parte externa del órgano del oído* (oído の器官の外の部分) となっていて、*oreja* が oído の包括部分の対応語であることがわかる。そこでこの対応語は二次的なものとなる。それゆえ、「外耳」を oído の基本義のなかの意義特徴の VI 「包括部位」のなかに位置づけて、そこから *oreja* の基本義とつなぐことにする。

2) 「聴覚」は基本義のなかの意義特徴 III 「機能」から拡張していると考えなくてはならない。耳殻に「聞くこと、聞こえること」という機能があるかどうかは解釈が分かれようが、「聴覚」という拡張義が存在すれば、そのような機能が意識されているのであろう。スロット III 「機能」を加えることにする。そして機能の類似性に注目した隠喩で拡張していると解釈する。

3) の「耳殻」は外耳の大部分である。語義として確立しているので、「外耳」からその一部として換喩で拡張している意味となろう。

語義の 4) から 7) までは *oreja* の、頭の両側にあるという「位置」の意義特徴との類似に注目して拡張した語義であることがわかる。しかしながら 4) 「靴の両側面」も 5) 「道具の先端の二股部分」も 7) 「ウイングチェアの頭もたれ」も、耳殻の形状とは似ていない。そのうちで *oreja* の形状との類似がうかがえる拡張義は 6) 「取っ手」ぐらいであろう。また、4) 「靴の両側面」は *oreja* の様態が関与している。軟骨組織のように柔軟であるからである。そこで日本語とは異なって、意義特徴のスロット IV 「様態」に〈軟骨組織状〉という概念を加えることにする (ただし作図の都合上、スロット III と入れ替えておく)。

### 3.3. oído / oreja の多義構造

スペイン語で聴覚器官に対応する 2 語 (対応語の oído と副対応語の oreja) を組み合わせて、それらの多義構造を分析すれば、以下の図 2 ようになるだろう。スペイン語の場合も、日本語の「耳」と同様、分析してみると意義特徴としては I, II, III, VI のみで間に合うようである。しかしスロット I 「形状」にはいくつかの形が含まれているものの、oído の基本義からは形状にかかわる意味拡張は起こっていない。なお、副対応語に関しては枠を点線で示すことにする。

## 4. まとめ

今回は日本語とスペイン語の多義語として〈聴覚器官〉との対応語を選んで、その多義構造を構築し、比較対照の資料を作成することにした。そして両者の構造図を比べてみると、色々なことが分かる。基本的な情報であるが、日本語の 1 語に対応する概念が、スペイン語では 2 語で表現されているから、両者の複数の語義の拡張の仕方が異なっている。その異なりかたは図 1 と図 2 を対比すれば明らかになるであろう。拡張義の多くは共通し

ているが、違っているもののいくつかは文化の相違に基づいていることもわかる。

なお、スペイン語の *oído* と *oreja* の扱い方についてであるが、今回の分析によって判明したことがある。定義が聴覚器官であることから、*oído* を対応語に、そして *oreja* を副対応語にしたのであるが、その語義の拡張の度合いからすれば、スペイン語ではむしろ、*oreja* への注目の度合いのほうが大きいのではないかと、ということである。意外な発見であった。

スペイン語の〔耳〕の多義構造

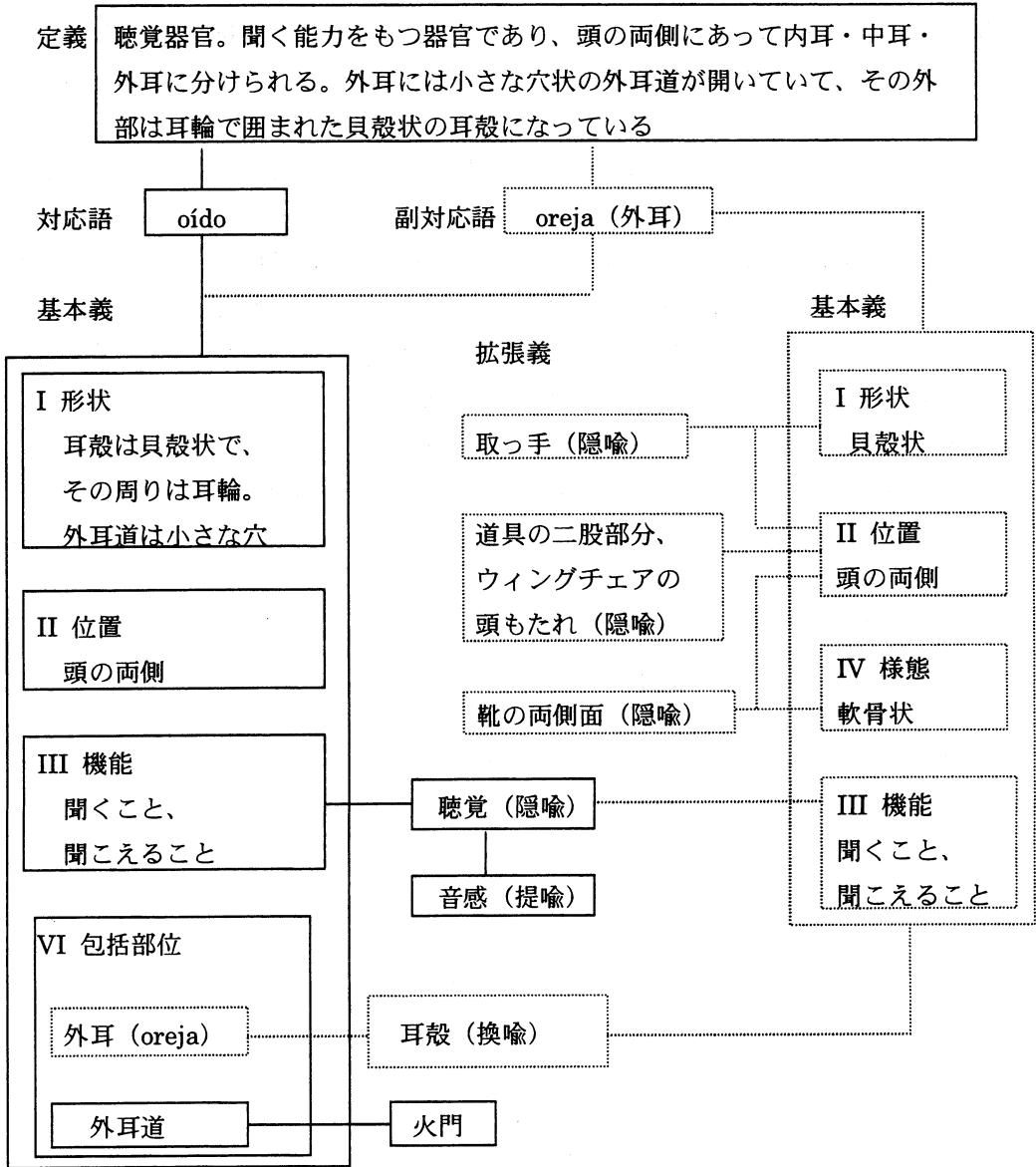


図 2

## 注

1. 「大辞林」には他にも「針のめど」、「上製本の背の一部」、「暖簾の乳(子)」、「兜の吹き返し」が、「明鏡」には「イカの体の先端にある遊泳器官」という語義が示されていた。
2. 多面的多義(焦点化語義)の扱いについては、分析方法によって意見が異なることになる。三好(2008)の2.3.項や三好(2009a: 232-3, 235)を参照されたい。
3. 辞書に登録されている慣用句としては、「日本国語大辞典」の見出し語「みみ・耳」の子見出しの「みみを数える」や「みみを読む」、「広辞苑」の見出し語「め・目」の語義説明のなかの「みみが欠ける」などがある。いずれも「みみ」が大判・小判の枚数を指しているが、それを(特定の数が揃った)複数概念の「みみ」と解釈しても慣用句の意味は成立するであろう。
4. 日本語で針の穴を「目」と呼ぶのは外国語の影響によるのではないかと考えられる。三好(2009b: 52)を参照されたい。
5. なお、「日本国語大辞典」の見出し語「みみ・耳」には、古語辞典(たとえば「旺文社古語辞典」)と同じように、ほかにも「聞いた話。聞こえてきた事柄。うわさ」という語義が含まれている。この語義は、「機能」の意義特徴の〈聞くこと。聞こえること〉から、隣接関係の換喩によって拡張したものとなろう。
6. Sentido corporal que permite percibir los sonidos.
7. Aptitud para percibir y reproducir los temas y melodías musicales.
8. Agujero que en la recámara tienen algunas armas de fuego para comunicar este a la carga.
9. Cada uno de los órganos que sirven para la audición.
10. Órgano externo de la audición.
11. Sentido de la audición.
12. Ternilla que en el hombre y en muchos animales forma la parte externa del órgano del oído.
13. Parte del zapato que, sobresaliendo a un lado y otro, sirve para ajustarlo al empeine del pie por medio de cintas, botones o hebillas.
14. Cada una de las dos partes simétricas que suelen llevar en la punta o en la boca ciertas armas y herramientas.
15. Cada una de las asas o agarraderos de una vasija, bandeja, etc.
16. En los sillones, butacas, etc., cada uno de los dos salientes del respaldo que sirven para reclinar la cabeza.



## 参考文献

- 日本大辞典刊行会 (1981) 『日本国語大辞典』(縮刷版、第九巻)、小学館。
- 松村明ほか編 (2001) 『旺文社古語辞典』(第九版)、旺文社。
- 三好準之助 (2008) 「語彙の対照研究のための多義構造の記述モデル」、京都産業大学論集、人文科学系列第 38 号、pp. 1-33。
- 三好準之助 (2009a) 「多義構造の分析モデルの修正と応用」、京都産業大学論集、人文科学系列第 40 号、pp. 223-240。
- 三好準之助 (2009b) 「多義語『目』と‘ojo’の日西対照研究」、日本イスペインヤ学会誌「イスペインカ」、Vol. 53、pp. 41-60。
- 三好準之助 (2010) 「『台風の目』と ojo del huracán: 日西比較研究一〈目〉の意義特徴との関わりー」、京都産業大学論集、人文科学系列第 41 号、pp.1-21。

語義設定のために参照した辞典(本文では左端の略語を使う)

### 日本語

- 岩波 - 西尾・岩淵・水谷(編)(2007)『岩波国語辞典』、第6版、岩波書店。
- 広辞苑 - 新村出(編)(2006)『広辞苑』、第5版、岩波書店。
- 新明解 - 山田忠雄ほか(編)(2005)『新明解国語辞典』、第6版、三省堂。
- 大辞林 - 松村明(編)(1992)『大辞林』、第2版、三省堂。
- 明鏡 - 北原保雄(編)(2002)『明鏡国語辞典』、初版、大修館書店。

### スペイン語

- アギラル - Seco, Manuel et al. (1999), *Diccionario Del español actual*, Aguilar, Madrid.
- クラベ - Maldonado González, Concepción (dir.) (1997), *CLAVE. Diccionario de uso del español actual*, Ediciones SM, Madrid.
- アカデミア - Real Academia Española (2001), *Diccionario de la lengua española*, 22.<sup>a</sup> ed., Madrid.
- ラルース - Lucena Cayuela, Núria (dir.) (2001), *Gran diccionario de la lengua española*, Spes Editorial, Barcelona.
- モリネル - Moliner, María (1998), *Diccionario de uso del español*, Gredos, Madrid.
- サラマンカ - Gutiérrez Cuadrado, Juan (dir.) (1996), *Diccionario SALAMANCA de la lengua española*, Santillana y Universidad de Salamanca.